

ニクラス・ルーマン著／カイーウーヴェ
エ・ヘルマン編／徳安彰訳

『プロテスト』

——システム理論と社会運動』

評者：兼子 論

本書は20世紀後半のドイツ社会学を代表し、社会システム理論の第一人者でもあるニクラス・ルーマンによる、プロテストおよびプロテスト運動に関する、1980年代半ばから90年代半ばにかけての諸論考を編纂したものである。

編者のカイーウーヴェ・ヘルマンや訳者の徳安彰も述べるように、これまでルーマンの社会運動についての研究はほとんど知られていなかった(38, 258)。だが、東西ドイツの統合に際して「社会的な市場経済やその民主主義的配当への信仰よりも強く、プロテストする習慣が西ドイツの歴史の中に確固たる位置を占めている」(183)西ドイツを背景として、プロテストおよびプロテスト運動についての多くの論考をルーマンは残している。まずは原著の構成を紹介しよう。

序論 カイーウーヴェ・ヘルマン(編者)

pp.9-50

近代社会はエコロジー的な危機に対処できるか [講演] pp.51-72

トロイの木馬 [インタビュー] pp.73-88

オルタナティブなきオルタナティブ [新聞エッセイ] pp.89-92

近代社会の自己記述におけるトートロジーとパラドックス [学術雑誌論文] pp.93-

123

女性、男性、ジョージ・スペンサー・ブラウン [学術雑誌論文] pp.125-178

参加と対峙 [新聞エッセイ] pp.179-183

環境リスクと政治 [未公刊] pp.185-201

システム理論とプロテスト運動 [インタビュー] pp.203-237

プロテスト運動 [未公刊, のち『社会の社会』(法政大学出版局)に所収] pp.239-255

訳者あとがき pp.257-266

以上のように、各パートは講演、インタビュー、新聞エッセイ、そして学術雑誌論文とさまざまな体裁を取り、かつそれぞれの分量も一定ではないので、それぞれを個々に紹介することはあまり生産的ではない。そこで本評では、ルーマンのプロテストおよびプロテスト運動論のエッセンスを整理することでその紹介に代えたいとおもう。

なお、原著におけるルーマンの関心は、大きく分けて2つの論点からなる。ひとつは、近代社会におけるプロテストやプロテスト運動の位置づけを明らかにするというものである。もうひとつは、それらを彼がいう意味でのシステムとして理論的に定位するというものである。

1. 近代社会とプロテストおよびプロテスト運動との関係

はじめにルーマンによる、近代社会におけるプロテストおよびプロテスト運動の位置づけをみてみよう。ルーマンは近代社会を、政治や経済、法、そして科学といった、それぞれの機能に特化したコミュニケーションから構成される社会だとする。ここで「それぞれの機能に特化した」というときには、経済でいえば「支払／不払」、政治でいえば「与党／野党」、法でい

ば「合法／不法」、そして科学でいえば「真／非真」といったように、二項の対立する選択によって成立するコードに基づいて、コミュニケーションが（再）生産されることを含意している。

そこでルーマンが近代社会の特徴として挙げるのが「同一性の代表」の不可能性、すなわち、社会の中での社会の代表が競合なしに成立する可能性が放棄されなければならず、いかなる機能システムも、みずからがこの特権的地位であることを主張できないという点である（96）。例えばエコロジーの問題でいうと、科学や技術、そして経済が重大な影響を及ぼす根拠があるものの、それぞれの機能システムによるこの問題への取り組みが、機能分化からなる全体社会にそのままはね返るといふ根拠はない（59）。

よって編者のヘルマンも指摘するように、このような機能分化には、あらゆる機能システムは、社会を特定の観点からのみ見るので、どの機能システムの管轄領域にも入らないような機能システム特有の派生問題を自らは認知しないという派生問題が結びついている（24）。環境問題が企業活動によって引き起こされるとしても、問題や被害が貨幣に換算できなければ、経済的主体である企業には問題に積極的に従事するインセンティブが与えられないといった事態は、その典型的な例であろう。

それでは、このような近代社会の構造的性格のなかで、プロテスト運動はどのように位置づけられるのか。ルーマンはまず、機能的に分化した社会は、つねに機能システムのコミュニケーションに対する不満足のコミュニケーションをも可能としたうえで、そのことが、プロテスト運動の持続的な機会を提供すると述べる（68-69）。そのうえでルーマンは、機能的に分化した社会においては、社会全体を代表しすべての機能システムを拘束し得る規範をコミュ

ニケーションできる特権化した立場は存在しないが、そうしたなかで、不安のコミュニケーションがその代役を申し出るといふ。なぜなら、不安のコミュニケーションは、不安があるという人に、不安がある事実を否定することはできないことから、つねにそれは真正だというメリットがあるからだ。そして、このような不安のレトリックは、社会の内部にしながら機能システムの外部にあり、それと同時に不安の道徳は原理の道徳の機能的等価物となることで、規範的原理がもはや説得力を持ってコミュニケーションできない場合に、その代替物を提供するという（69-70。強調は著者）。

まさに環境保護運動がそうであるように、プロテストおよびプロテスト運動は、法の合法／不法、経済における支払／不払といった機能に特化したコミュニケーションが看過する不安を掬いだす。ここからルーマンは、プロテストおよびプロテスト運動を、機能的に分化した社会において、社会の中で生じながらも社会の外にあるかのように生じ、社会に対する責任から行なわれるが社会に抗して行われるという（242。強調は著者）、パラドックスを内在する社会システムと定義する。

2 社会システムとしてのプロテストおよびプロテスト運動の特性とその評価

ところで、プロテストおよびプロテスト運動をシステム理論に組みこむ際に、ルーマンは何を含意しているのだろうか。次にこの点についてみてみよう。

ルーマンは、プロテストおよびプロテスト運動は、彼が社会にとっての免疫システムと呼称するものの役割を果たすという。前述のように、プロテストおよびプロテスト運動は、機能的に分化した社会の内部にしながら、機能システムを外から観察するという立場を取ることで、自

らはあたかも社会の外側にいるようにふるまう。ルーマンによれば、そのようなプロテストおよびプロテスト運動は、社会システムの内部で内部と外部の代替物を作り出し、しかもそれが世界のありかたという形式を前提とすることにより、システムに対する反抗となる。そこで社会運動は、機能システムの中できわめて選択的にしか自己を記述できない近代社会の、現実テストのチャンスを提供する(229)。そして、ここで「現実テストを提供する」とは、機能システムが生み出し、しかも機能システムが解決できないか下手な解決をする問題を、マスメディアと関係することでテーマ化することによってなされる(224)。ここからルーマンに従えば、社会運動の機能はこのテーマ化による社会の自己記述への貢献にあるということになる。

さて、このような性格をもつとするプロテストおよびプロテスト運動に対して、ルーマンは両義的な評価を与えている。それは、機能システムに対する不安を表明し、機能システムが解決できない問題をテーマ化するという社会運動の作動が、近代社会における新たな道徳としてのポテンシャルを有するという点に起因する。

というのも、確かにプロテストおよびプロテスト運動はエコロジー問題に代表されるように、機能システムに対するラディカルな批判の立場をとる。だが社会運動による機能分化への批判は、システム境界を設定する形式の変化をカタストロフィーとしてしかイメージできず、機能分化に代わる社会の進化を見出すことのできない道徳的批判に留まる(119)。例えば、環境保全のためには世界的な人口調整が必要であるという優生学的思想にもとづくエコファシズム運動などが、ここでの典型的な事例として挙げられるだろう。

ただしルーマンは、このような社会運動の道徳的性格を全く拒絶するというわけではない。

彼はこの点に関して「プロテスト運動が、個人であれエコロジー的条件であれ、環境を社会の他のシステムよりもよりよく知っており、より正しく判断しているということの証拠は何もない。しかしこの幻想こそが、プロテスト運動にとっては盲点の役割を果たし、コミュニケーションに対するコミュニケーションの抵抗を引き起こすとともに、プロテスト運動がなければ構成できないような現実を社会に提供する」(252)と述べている。

社会運動が“社会の外から”社会を観察することで社会の自己記述を提供するというのは幻想である。だが社会運動は、機能システム自身が生み出しながらもそれが解決できない問題の受容を促す刺激を与えることによって、近代社会における道徳や規範として機能するかもしれない。不安のコミュニケーションについて「われわれはさしあたり、この不安のコミュニケーションと機能のコミュニケーションの二重性とともに生きていかなければならないだろう」(70)と述べるように、機能システムと社会運動という2つのコミュニケーションと関係しながら両者の偶発的な関係に期待を寄せつつ、システムとしての社会運動がいかなる問題を抱え得るのかに関する理解をシステム理論の立場から明示する。これが、プロテストおよびプロテスト運動への、ルーマンの暫定的な結論である。

3 ルーマンプロテスト論の意義と課題

プロテストおよびプロテスト運動についてのルーマンの考察をまとめたところで、ここでは本著の意義についてふれてみたい。

まずは冒頭でも述べたように、そもそもルーマンが長きにわたって社会運動に関する研究を発表してきたことがほとんど知られていないこともあって、プロテストおよびプロテスト運動

に対するルーマンの知見を紹介するという意義を本著は有する。またこのことは、同じドイツの社会哲学者であるユルゲン・ハーバーマスの論争以来強く残る、「保守主義」「社会的テクノクラート」としてのルーマンという評価を払拭する契機となる。さらにこのことは、訳者の徳安も指摘する、社会システム理論と社会運動論の不幸な対立（261）を止揚するきっかけにもなり得るだろう。

だが本評でも明らかなように、このことはルーマンが社会運動をただ積極的に評価するだけであることを意味しない。むしろ、彼自身の表現を借りれば、彼の社会運動論は、運動実践の側にとっては「トロイの木馬」に、すなわち運動を矛先とするラディカルな批判にもなる。彼の関心はシステム理論の立場から社会運動についての理論的性格を明らかにすること、そしてそれによって「新しい社会運動」の理論的な欠如を補完することにある。そのため運動実践が“直接的に利用可能な”思考を供与することはそもそも彼の意図にはない。少なくともこの点はまず銘記しておいたほうがいいとおもわれる。

しかしながら、ルーマンの社会運動論は、運動の「反省理論」という形での実践的な意義を有するとはいえるだろう。ルーマンに従うことで、運動に関わる人々、そしてなにより運動の外に多くの我々は、社会運動が顕示する道徳性に対して批判的眼差しを向けつつ、機能システムが看過する問題を浮上させるという道徳的役割に期待をかけるという、まさにパラドキシカルな態度を保持することができる。ルーマンが生きたドイツだけでなく、現代においては、新しい社会運動が常態化する「社会運動社会」化がグローバルな規模で進展している。そのような変動のなかでルーマンの議論は、社会運動に対するリーズナブルな姿勢を保持するのに貢献する。

最後にひとつ論点を提起して終わりたい。評者が本著に対して不満を感じたのは、機能システムの自己言及的な作動によってはテーマ化することができない不安を刺激として受容することを求める点に社会運動の特性を見出すというルーマンの立場からは、抗議をする側だけでなく、機能システム側が抗議を“受けるかもしれない”という蓋然性をいかに統制するかが焦点となるにもかかわらず、少なくとも本著では、この点への言及がほとんど見られなかった点である。

ルーマンが述べるように、機能システムはつねに、プロテストによる全体社会の自己記述に晒されている。ルーマンの論敵であるハーバーマスの語り口をまねれば、生活世界や市民社会から「社会を代弁する」というプロテストに晒されている、といえよだろうか。例えば現代の政治システムは、大規模なインフラ施設の建設や設置、税制や社会保障の改革、あるいは憲法改正などの際に、また経済システムは、本著で言及されるエコロジーの問題のほかにも、労働状況の悪化、企業間での独占や寡占、先進国と後進国とのあいだでの不公平な貿易について、それぞれ重大なプロテストに直面するかもしれない。ゆえに、このようなリスクを機能システムはそれ自体の作動の中でいかに組織化するのか（あるいはしないのか）、それはいかにすれば成功（あるいは失敗）するのか、などに関する体系的理解を提供することが、プロテストの社会システム理論のもうひとつの課題となるだろう。

（ニクラス・ルーマン著、カイウーヴェ・ヘルマン編、徳安彰訳『プロテストとシステム理論と社会運動』新泉社、2013年8月、266頁、定価2,800円＋税）

（かねこ・さとし 法政大学大原社会問題研究所 兼任研究員）